東北 VALUE SIGHT 秋田

学校週５日制が導入された平成７年、行き場のない子どもたちの受け皿の１つとして、秋田市桜の大人たちが私設の塾を立ち上げた。この塾では、自然や遊びの中から子どもたちが多くのことを学んでおり、子どもたちの父母が「自分の子どもがこんなに明るく笑うのか」と驚くほどだという。長く継続しているその取り組みを紹介する。

秋田わんぱくClub　桜たんけん塾　塾長

遠田　順夫（えんだ・よりお）

1945年、秋田県にかほ市生まれ。
大曲農業高校、県立農業講習所卒業。65年に県農業改良普及員として採用され、70年に農業実習生として旧西ドイツで研修、ヨーロッパ諸国（12カ国）を視察。80年に秋田県連合青年会ヨーロッパ視察研修を案内。その他海外・AIA（県国際交流協会）スタデーツアーでネパール、アマゾン等を訪問。AIA GLS（グローバル・リーダーズ・スクール）でベトナム等に子どもたちを引率。95年に学校外体験活動「秋田わんぱくClub桜たんけん塾」を主宰。2004年に秋田県を退職後、秋田県産米改良協会や秋田県農業公社に勤務。青少年育成秋田市民会議副会長就任。

秋田わんぱくClub　桜たんけん塾　事務局
秋田市桜四丁目8-25

地域活動を通して 子どもの自主性・自発性を育てる

“旅”では、自然が残る原風景や歴史的建造物、そこに住む人々や思いも寄らない文化などに触れたり、味わったことのない特産物をいただいたりすることができ、心身ともに斬新な充実感を味わうことができる。新たな感動とすばらしい思い出が残り、また訪れたい期待感でいっぱいになる。

私が「秋田わんぱくClub桜たんけん塾」を開塾しようと考えたのは、若かりし頃の欧州への旅でのさまざまな体験を「私物化してはならない、子どもたちに伝えよう」と思い至った部分が大きく影響している。

開塾の背景

当時（平成２年頃）、「国際理解と協力」が叫ばれていた。日本人は欧米人に比し、知恵不足といわれ、特に①物を大切にする心がない、②他人に対する思いやりがない、③ガマンすることが出来ない、④家族のふれあいがない、⑤本当のことを言わない失礼さ、などが非難されていたのである。

このことは、①怒る人々がいなくなっている、②教えの格言が通じない、③家庭からコタツ・鍋料理がなくなった、④子供の笑顔が少ない、⑤子供はテレビゲームに夢中など、子どもたちをとりまく身近な日本社会の現実に起因しており、子育てシンポジウムでも話題となったものである。

この状況下で、主体的に自己主張できる子どもの教育、判断力の養成（哲学、人間学、会話のできる英語教育）等がカリキュラムに組みこまれるべきであるという課題解決策が出されたのである。

子どもたちが目を輝かせて活動している
「秋田わんぱくClub　桜たんけん塾」

「秋田わんぱくClub桜たんけん塾」の誕生

平成７年４月、学校週５日制の隔週実施に向け、PTAなど賛否両論が渦巻く中で、各地で子どもたちの受け皿づくりの模索が続いていた。そんな中、「とにかく行動に移そう」と桜四丁目町内会の仲間５人が立ち上がり、学校とは無縁の「秋田わんぱくClub桜たんけん塾」が誕生した。

桜たんけん塾は、遊びと触れ合いを通して、子どもたちの主体的な判断力と意欲的な行動を養うことを目標とし、開設メンバー５人が、登山、ケン玉などの遊びや動植物などに精通している“常任講師”として、子どもたちに知識や経験を伝えていく。また、常任講師の他、寺の住職や農業士などの専門家を“外来講師”として招くことで、幅広いメニューを用意した。

あくまでも主役は子どもたちであり、何をしたいのか、どこに行きたいのかを探り、講師陣がアドバイスしながら活動していった。

活動を進める上で、最も頭を悩ませたのは、子どもたちがケガや事故に巻き込まれた場合の対応で、「試行錯誤の連続だろうが、とにかく１年間走ってみて、細部はその中で考える」ことで合意した。

対象は小学４～６年生で、月１回程度「たんけん」した。太平山登山、素足での田植え、ブナの森探訪など多彩な企画を取り入れた。毎年10月には、ミネソタ州立秋田校（雄和町）のハロウィーンフェスティバルにも参加している。

活動では公共交通機関を使って移動し、運賃や入場料は子どもたちが自分で支払い、保険料を除いて実費主義としている。講師陣は手弁当での参加である。

桜たんけん塾への評価

平成10年５月に、それまでの活動が評価され、秋田県社会奉仕活動支援事業の補助金50万円を受けて、３年間の活動記録集「瞳が輝くとき」を刊行した。活動についての子どもたちの感想文や写真を掲載して、生き生きとした内容となり、地方紙でも紹介された。

平成19年１月には、〈青少年と発見！体験！秋田県〉第一回チャレンジ・コンテストにおいてみごとアドベンチャー大賞（最優秀賞）を受賞した。秋田県主催のこのコンテストは、青少年と異世代が一緒に各種体験活動等を通じて、心身の鍛錬とコミュニケーション能力を高め、社会性を身に着ける目的で実施されたものである。

さらに、平成25年５月には、青少年育成秋田県民会議定時総会において会長賞を受賞した。手こぎ舟を操りジュンサイ採りに挑戦したり、キリタンポやだまっこ餅を作ったり、塾での体験を発表するなどの当塾の活動が高く評価された。これらの遊びやふれあいのある体験活動により、子どもたちが主体的に考え・判断する能力が養われ、心身ともに意欲的にたくましく成長することができ、また、異年齢・地域の人々との活動で、協調性・他人を敬う心、挨拶やボランティア精神等が醸成されたことが成果として認められた。この他、自己紹介・体験発表・感想文チェック等の活動が、考えの組み立て、自己主張等に大きく影響し、自信溢れる対話ができるようになったり、家庭内で活動の報告をするようになって対話に弾みがつき、何でも話し合えるようになるといった成果が認められ、受賞に至った。

子どもたちの笑顔をいつまでも

「可愛い子には旅を」という言葉のとおり、さまざまな体験やふれあいにより、子どもたち自身が大きく成長することが理解できる。期待するのは「子供たちの笑顔」である。自然体験活動や農山漁村での感動体験により、ふるさとを愛し、自ら学び考える力や、社会を主体的・創造的に生きていくたくましい力がはぐくまれるのである。

保護者・地域・先生が自覚と価値観・信念に基づき切磋琢磨している姿は、子どもたちには確実に見えている。熟練した技や多くの知恵（智慧）等は日常の人間生活の中に溶解しているものである。子どもたちはただ、それらに接する機会がなく、ことばに表現できず、反応の仕方を知らないだけなのだ。子どもたちには見える形が必要なのだ。子どもたちのノンバーバル（言葉以外でのコミュニケーション）面まで読み取り、事故・犯罪を未然に防止することができれば、この上ない青少年の健全育成活動と考える。当塾がその一端を担っているとしたらうれしい限りである。

子どもたちと笑顔をかわす機会を創造する人々が増加してほしい時世である。